

ベトナム南部民家の特質

ードンナイ省フーホイ村の調査からー

概要 文化庁文化財部では、2003年より6ヵ年の予定で、ベトナム文化情報省（現文化スポーツ観光省）との間で、伝統的集落および建造物の保存、修復、管理の分野における技術協力に関する協力協定をむすんだ。この協定は2009年以降も継続され、当研究所でも文化庁の要請を受け、『紀要 2004』・『同 2005』『同 2010』でも報告したように、ベトナム北部ハタイ省ドゥオンラム村および同中部トゥアティエン・フエ省フォックティック村における集落調査をおこなった。2010年度はベトナム南部フーホイ村（Xa Phu Hoi）を中心とする調査研究をおこなうこととなり、当研究所も2010年9月と12月の現地調査に参加した。

フーホイ村はベトナム南部ドンナイ省ニョンチャ県に属する。ニョンチャ県は、ホーチミン市の南東約30kmに位置し、国道に囲まれた河岸台地とその周囲に広がるドンナイ川の洪積地からなる。ホーチミン市の近郊として注目を浴びており、台地上に大工業団地と高層住宅団地の造成工事が進行中で、河岸にはロンタイン国際空港の建設が予定されている。

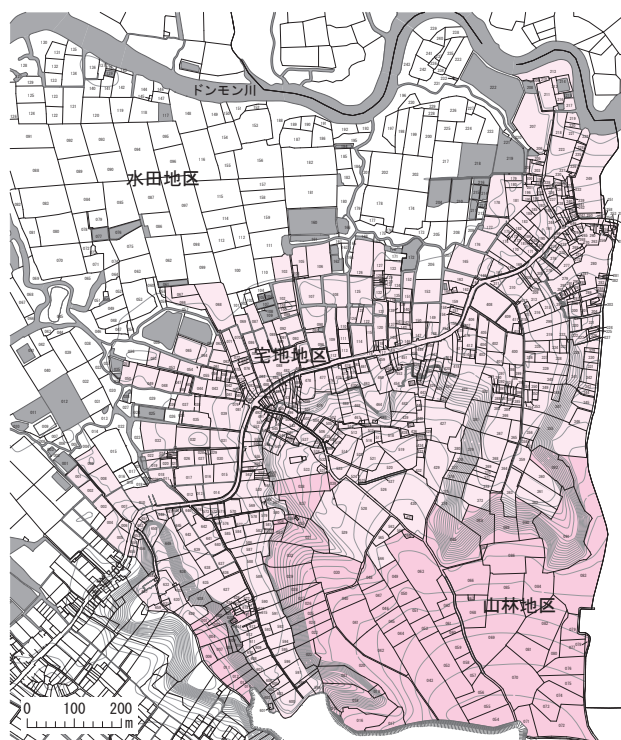


図37 フーホイ村フーミーⅡ集落の土地利用

調査の対象としたのは、フーホイ村内の4つの集落のうち、もっとも伝統的民家の残存率が高いと考えられるフーミーⅡ集落（Ap Phu My II）である。

集落の構成 この地区の土地利用は大きく3つに分かれている。工業団地の開発が間近に迫る南方の河岸台地上の山林地区、ドンナイ川の支流ドンモン川沿岸に広がる北方の水田地区、その間の微高地を東西に走る国道769を中心に広がる宅地地区である。また集落の東端および西端には水田地区からの谷が南方に延び、宅地が広がっている。図37は新たに作成した地図をもとに、今回の調査のために便宜的に3地区に分類したもので、実際の土地利用とは若干異なる面があるものの、等高線を参照すれば、概ね土地利用の傾向を把握できる。

山林地区は主として植林地と果樹園で構成され、一部を草地として放牧がおこなわれている。また若干ながら宅地も散在する。山林地区と宅地地区を隔てるのは、河岸台地から落ちる斜面で、ここには人の手がほとんど入らない天然林を残している。台地上の斜面落ち際、あるいは東端・西端の谷に接する尾根の先端付近には、比較的まとまって墓地が営まれている。

北方の水田地区は、稲作をおこなう水田とともに、食用のアヒルを飼うための池が散在し、池岸にはアヒル飼育用とアヒルを警護するための居住を兼ねた小屋が設けられている。水田地区には小さな水路が網の目のように張り巡らされており、これを利用して生産した米を自宅へ運ぶという。そのための小舟もあちこちで見られた。

宅地地区は国道沿いに商店がみられるものの、基本的には水田地区で稲作をする農家で、東の谷筋では水量豊富な湧き水を利用してライスペーパーの生産が自宅の敷



図38 水田地区の景観（奥が山林地区の台地）

地内でおこなわれている。このほかフーホイ村の特産物はお茶というが、フーミーⅡ集落では、自家消費のお茶を栽培しているところはあるものの、大量生産をする茶畑のようなものはない。

街路と宅地の敷地 国道から幅2m前後の小路がのび、この小路沿いに宅地が展開する。小路の大半は袋小路で、東西の谷沿いの小路は奥が深い、通常は水田手前の宅地、あるいは谷から落ちる斜面前の宅地で止まる。また台地上に上がる小路は台地上を周回する小路となり袋小路とならない。

敷地は、国道を境に水田側では比較的大きな敷地が多く、山林側ではやや小さな敷地が多いが、これは分割相続によってもともと大きな宅地が細分されたためという。敷地内には自家消費あるいは現金収入とするために果樹あるいは茶を植えることが多く、全般に緑が豊かである。また、水田側では小水路に近接し、隣家との境は水路や高低木の樹木で仕切られる。ただし境界が明確でない場合も多い。

公共建築 デイン(Dinh:集会所)は集落中心部の台地上と、水田地区のドンモン川畔にある。いずれも入母屋造瓦葺の建物を前後に3～4棟ならべて、あいだに樋を設けた構造をもつ。祭壇背後などに間仕切り壁を設けるものの、基本的には柱間装置を設けずに開放とする。また台地上のデインには祭りの準備をする際に使用する小建物(Nha Vo)が若干位置を離れた敷地に建つ。そのほかの公共建築としては西端部の尾根上に仏教寺院(鉄筋コンクリート造)が存在する程度である。

民家の様相 伝統的な民家はさほど多くない。地図上で宅地地区に分類した659の敷地のうち、伝統的な比較的

古い民家は27件ほどで、建立年代は新しいものの伝統形式を保つ民家が少なくとも43件ほどあり、その他の大半はレンガ造の現代的な民家や商店である。また、ヤシ屋根やヤシ壁をもつ仮設建物が、日除け施設や物置等として用いられている。

伝統的な民家の形式は、主屋と付属屋を接して建て、そのあいだに樋を渡す構成をもつ。主屋は桁行3間ないし5間、棟持柱をもち、正面1間通りを吹き放ちとする。梁行は5間ほどで、屋根は入母屋造あるいは切妻造とし、瓦葺で、通常、主屋は平入とする。内部は総柱式の柱配置をもち、梁行の背後1間を仕切って物置とするほかは一室空間とし、天井も張らない。このため、室内では胴張り、および内転びのある柱が林立する建物構造を仰ぎ見ることができる。付属屋は棟持柱とする場合と、梁行1間の身舎に廂・孫廂をもつ形態とする場合とがあり、主屋の構造形式と異なることが多い。建立年代が新しい民家でも、柱を省略したり、角柱を用いたりする場合があるものの、伝統的な形式に則る民家は比較的多い。

主屋は祭壇と客間、付属屋は居間や寝室の機能をもつ。台所の機能は付属屋内部にもつ場合もあるが、さらに別棟とする場合も少なくない。

フーホイ村の魅力 フーホイ村の民家は北部ドゥオンラム村や中部フォックティック村と異なる形式をもつが、伝統的な古い民家はこれらに比べると多いとはいえない。フーホイ村の魅力は、水路・水田・山林・宅地といった土地利用が明瞭で、生業にともなう生きた村である、という点であろう。建物だけでなく、周辺の環境や人びとの暮らしを含めたやや広い視点で、村の構造や民家の形態についてさらに分析を進めていきたい。(箱崎和久)



図39 台地上のデイン



図40 伝統的民家の外観(手前が主屋、奥が付属屋)